

盃に灯を注ぎて、飲み干す件の何とやら。

1mm

*

ひゅ、と。微かに鳴いた風に、ちらと視線を巡らす。

暗い暗い闇に浮かぶ、青白い影。長い衣の袖をひらりと翻し、それはこちらを向いて、ゆるりと笑んだ。

魔力を灯した青い瞳が、ゆっくり一度瞬いて。

「——それじゃ、始めるか？」

「ええ。行きましょう」

共にふわりと空を蹴る。向かう先は、人の街。

——夜は、人ならぬ我ら『夢喰い』の、一日の始まりの時間である。

** 盃に灯を注ぎて、飲み干す件の何とやら。

*（鳥啼く声の、する前に。）

頬を撫でていく風は生温い。

雨上がりの空気は、じつとりと重く肌を圧してくるものだが、嫌いなものではなかった。なにせ雨の中では飛ぶのが難しい、降り染めた後の空は、おかげで美しく思えるものだった。

ゆうー、ゆうーと、音になりきれしていないような音で、夜風は闇を縫っていく。

その独特の夜の空気を断つように、パンッと、乾いた音。傍らに立つ少女は、合わせた手をそのままに目を閉じ、じつと俯く。

そうすると、落ちていくばかりだった空気は波状に揺らめき、淡い光を帯びて夜闇を彩り始め。更に美しいものへ変わっていく。

思わず目を細めた。

何度見ても——それこそ、比喻でなく毎日見ても。見とれるものだ。彼女の魔力は。

やがて、魔力の光は方々に散り広がり、一瞬の間、ぽっぽっと、幾つもの一斉に光の柱を建てた。

彼女はそっと手を降ろすと、こちらを向き小さく頷く。魔力が揺れる瞳は、無表情な彼女の秘められた内情を映しているようで、この時はいつも微笑ましく感じられる。

気持ちそのままに笑って頷き返すと、彼女もほんの僅かに頬を緩め、ゆるりと光の一面を見渡した。

光の柱は、夢の在り処だ。即ち、光を辿って、自分達は夢を刈り集める。

「よろしくお願いします」

彼女が言う。彼女ら夢狩りの種と、自分ら夢魔の種。似て非なる自分達は、昔から手を取り合い、夢を刈ってきた。刈るための力を自分達が提供し、彼女らが刈る。勿論、独自で刈れないわけではない、手を合わせ始めたのは単に効率がいいからで。

そして、単に食事のためだけに行われていたこの行為は、今では『仕事』として行われている。

「りょうかい」

頷いて彼女へと歩む。ゆっくりと。彼女は、未だに自分に緊張しているようで、時々不安そうな目をするから。

ゆるりとその頭を撫でて。

今度は自分が目を閉じ俯く。しゃら、と、彼女が魔具を手繰るか細い音が、耳に心地いい。

そして。

彼女は言う、

「巡らせ、辿れ、夢魔の糸。我らは、」

無意識に、笑み。

合わせ、

「夢を喰らう者也。」

*

* (夢の残り香)

夜も深き。

雨でぬるまったくなくなっていた空気は、時間とともに鋭くなっていった。今はただ、冷たさを分け与えようとしてくるのみだ。

しんとした、人の街の夜は、好きだ。勿論、賑やかな夜もいいものだとは思いますが、やはり本来あるべき静の時間は、空気がまっすぐに美しい。

「深夜勤怠いよお、眠いよおお、」

……例え隣に、凜の欠片もない者があったとしても。

「毎夜毎夜、同じことをよく言いますね。いい加減慣れたらどうですか、そんなに変わらないでしょう通常夜勤も深夜勤も」

「うー、そう思ってたけどさあ」

彼女は吐き出しながら、無造作に魔具を手繰る。細い鎖に連なった小さな鍵の、ひとつが淡く光を帯びていた。

「やっぱ、取り扱い危険物ばかり触っているとさあ。ね、」

「……だから、覗くのを止めなさいと言っているでしょう、私は」
「分かってるよー！ でも気になっちゃうんだよおお、」
「要は自業自得じゃないですか。仕方ないでしょう。ほら、お仕事しますよ」

「はあい……」

溜め息小さく、吐いて、吸って。

俯いて目を閉じた彼女が、空気を魔力で澄ます。そうすれば、漂う、刈り取られた夢の残り香。

そして、それらの中に、いくつか残ったままの——淡い青紫色の、光の柱。

通常の数多の夢の光柱と異なるそれらは、危険物の色である。即ち。

「……苦しむ未来を回避してあげるお仕事ですよ。私達がしていることは。大事な、ことです」

「うん。分かってるの」

ひっそりと囁いた言葉に答えた彼女の声は、もう本来の凛々しさを取り戻している。

こういうところは愛しい。声には出さずに、笑って。

「お願いします」

「はい。行きますよ。……本当に。今日は、泣かないようにするんですよ」

「うー……はあい、覗かないようにする……」

巡らせ、辿れ、夢魔の糸。我らは、

「夢を喰らう者也。」

……最も、これらは、食べるもの達ではないけれども。

*

* (掬えなかった夢を救う)

遠くに、太陽の匂いを感じる。

もう少ししたら、空の色が変わり始めるだろう。色鮮やかな世界。仕事終わりに見られるそれに、何度魅せられたことだろう。日々違った美しさを描くこの時間の空が、一等好きだ。

だからということもあって、この時間の、この特殊な仕事も。

「このお仕事も大分減ってきたわね。最近は優秀な回収さんが多いから」

「そうだな。かといって、完璧にこなされて、無くなっても困るけど」

「……いいことじゃない？」

「ブランクが発生し出したら姉さん、やり方忘れるだろ」

「……そこまでじゃないと……思うわ……、」

小さく肩を竦める、優秀な弟が恨めしい。けれど。

「好きだもの。素敵なこと、させてもらってるって、思うわ」

「ああ」

それは、同感。

柔らかく笑う横顔に、つられて笑って。

しゃらりと。連なった魔具は、一般的なふたつの鍵だけではなく。

「姉さん。お願いします」

「ええ。お願いします」

彼が、目を閉じて俯く。

「巡らせ、辿れ、夢魔の糸。」

拳がっている光柱は、極僅か。その取り残された光の色は、赤紫——回収し損ねてしまった、取り扱い危険物の色だ。

通常、夢は、刈り取れば人の意識には浮上しないため、記憶に残ることとはない。しかし、刈り取り損ねてしまった夢は、起床と共に意識に結び付くため、人の記憶に残ることになる。

それが何ともない夢ならいい。

けれど、……それが、悪夢だった場合は。

一度意識に根付いてしまったものを刈ることはできない。だから、この仕事の目的とは、人を苦しめ続ける悪夢を緩和することだった。

「今日はいちご味のシロップですって」

魔具の霧吹きで、赤紫を薄めながら言う。

「甘あい夢に変わると、いいわね」

「……いつも思うんだけどさ、味をつけるのはどうかと思うんだよね……。そもそも意味ないし……意味あったとしても好き嫌い考慮したらマイナスになることもあるかもしれないだろ……」

返ってきた声は、げんなりとしていた。そこだけは不服ポイントらし

い。

しかし自分は味云々より、悪夢が甘い夢に変わるってちょっとどんな展開になるのか気になるなあ、といつも思っている。気付いたら弟はもっと複雑に悩んでしまうだろうから、言わないけれど。

「いいじゃない。……はい、こちらは終わったわ」

「お疲れ様」

赤紫だった光はやがてその色を潜め、霧吹き終わると、通常の白い光柱へと変わる。

あとは、これをそのまま今夜は刈らずに、その人が一度起床して、打ち消された悪夢を意識してから。

きつともう、この夢に魘されることはないと。

祈って。

「おやすみなさい。」

どうか明日には、優しくて、美味しい夢を。

*

* (巢食うゆめを救う啼く鳥を、祈って。)

暗い暗い闇に浮かぶ、青白い影。

いつも爛々と明るいはずのその瞳は、……薄らと影を帯びている。

長い衣の袖をひらりと翻し、彼女はこちらを向いた。顔は上げない。
魔力を灯した青い瞳が、ゆっくり一度瞬いて。

「……ごめんなさい」

「今更だろう？」

困ったことだ。本当は。だから、彼女の謝罪を否定はしない。けれど。
かと言って、今更止めることもできないのだ、自分も。

夢を刈ることはできる。夢は、人の意識に根付く前のものだからだ。
つまり、人の意識に根付いているものは刈れない——人の記憶は、刈れない。

悪夢に、霧吹きをかけて、通常に戻して。しかし、彼の人の夢は、こうして毎晩赤紫に染まるのだ。その、理由は。

「……本来、干渉できることじゃないんだ。どうしようもないだろう、これは……本当なら、本人が、向き合ってどうにかするしかないことだ」
分かっているんだろう。

そっと、頷く顔色は、暗い。

分かっているのだ。彼女も、彼女を止めきれない自分も。

それでも、

夢とは違う、暖色の小さな光の珠。夢を刈り取った後にするのと同じように、そっと、それを意識の裏側に施錠する。

どうしようもないのだ……過去の記憶に苦しめられて見る、記憶を現した悪夢だけは。

だから、とも言える。

どうしようもないと分かっているながら、向き合えない彼の人を見ていられず、思わず手を出した。

向き合えるようになるまでは、それが——ただの『悪夢』だと、思えるように。夢と思えるような微睡みの底へ落として。

「……。おやすみなさい、」

小さな小さな彼女の声に、そっと目を伏せる。

願わくは、いつか。

*

君の夢ばかりは、覚めることを。

*

(3647字)